

白藍塾オリジナル

2013入試小論文分析&解答のヒント

2013年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●早稲田・スポーツ科学部

2010年度と同様、複数の課題文を読んで答える問題になっている。ただし、今回は二つの課題文が明確に対立する主張をしているので、論点がわかりやすい。

簡単にまとめると、課題文Aは、「国際間の緊張を緩和して、国際交流を活発にする手段としてスポーツを役立てるべきだ」と主張している。それに対し、課題文Bは、むしろスポーツがナショナリズムを煽って紛争や戦争を激化させる危険性を指摘している。

Aが書かれた1970年代からBが書かれた2000年代まで、「この間の国際情勢の変化を踏まえ、スポーツの功罪両面に触れつつ、これからの人類社会にスポーツが持つ意味について」考えることが求められている。二つの課題文の内容を踏まえて、「これからの人類社会において、スポーツを国際交流の手段として活用するべきか」等と問題提起をするとよいはずだ。そして、イエス・ノーのどちらの立場を取るかに応じて、「スポーツの功罪両面」を「意見提示」と「展開」のそれぞれに振り分けて書くとよい。

1970年代から2000年代までの間に起こった国際情勢の変化と言えば、冷戦の終結であり、グローバル化の進展だろう。Aでは、スポーツというものがイデオロギーの対立を緩和するものと考えられているようだが、冷戦が終わってグローバル化している現在では、イデオロギーや政治体制の違いが薄れている分、スポーツが直接的にナショナリズムを発現させる手段となっているとも言える。そうした状況を踏まえて考えることができれば、かなり鋭い小論文になる。

イエスの方向で書くなら、「スポーツは、国の思惑に関係なく、市民同士で楽しめるもの。そうした草の根レベルの交流を進めることで、国際平和に貢献できるはずだ」「スポーツの世界でも選手や指導者のレベルでグローバル化が進んでいる。スポーツの世界そのものがグローバル化している今こそ、スポーツを媒介として国境を越えた交流を進めることが可能」などが考えられる。ノーで書くなら、「スポーツは国民を一つにまとめる力があるだけに、簡単に国威の発揚に利用されてしまう危険がある」「スポーツは本来、個人が実力を競い合うもの。国際交流の手段として使うのは、スポーツを政治の道具にし、スポーツの価

値をおとしめることにしかない」などと論じることができるだろう。

それほど深める必要はない。問題点を理解していることを示せばそれで十分。

いずれにせよ、白藍塾で勉強してきた受験生にとっては取り組みやすい課題だろう。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>